

日本人幼児の非過去形による未来時制の習得

齊藤 都 国際言語文化研究科 日本言語文化専攻 博士前期課程2年

先行研究と問題点 これまで、日本語の時制の習得についての研究は CHILDS のコーパスデータを中心に扱って議論されてきた (e.g., Shirai, 1993; Murasugi, Fuji & Hashimoto, 2010; Tatsumi & Pine, 2016)。実験的手法を用いた英語母語話者の幼児を対象にした研究では、3歳で時制を理解していることが報告されている (Wagner, 2001)。日本語母語話者の幼児においても、英語母語話者の幼児と同様の結果が得られるのかについては検討の余地がある。したがって、本研究では実験的手法を使用して3、4、5、6歳児の幼児を対象に「タ形」「ル形」の語形変化によって示される時制を、どのように理解しているのかを検討した。

方法 本研究は、横浜市内の保育園に通う3歳児から6歳児の幼児たちの協力を得て、データを収集した。

語彙的アスペクトの分類から活動動詞・到達動詞・達成動詞を選出し、それらを使用した未来もしくは過去の時制を含んだ質問を作製した。それらの質問文を幼児に提示し、当該動詞の未来もしくは過去を表した絵が描かれた2枚の図版から正しく時制を表現したほうを選択する課題を行った。具体的には、図1で示した(a)(b)(c)をPPT (PowerPoint) で順に提示した。(a)は導入スライドで、実験者が幼児に「ねずみさんはおもちゃであそんでいます。」と教示した。(b)は実験者が幼児に「ねずみさんがおもちゃをかたづける。」と教示し、スライドに絵がないことを知らせた。(c)は実験者が、2枚の絵があることを知らせ、「ねずみさんがおもちゃをかたづけるのは、どっち」と教示し、どちらか一方の絵を幼児に選択させた。

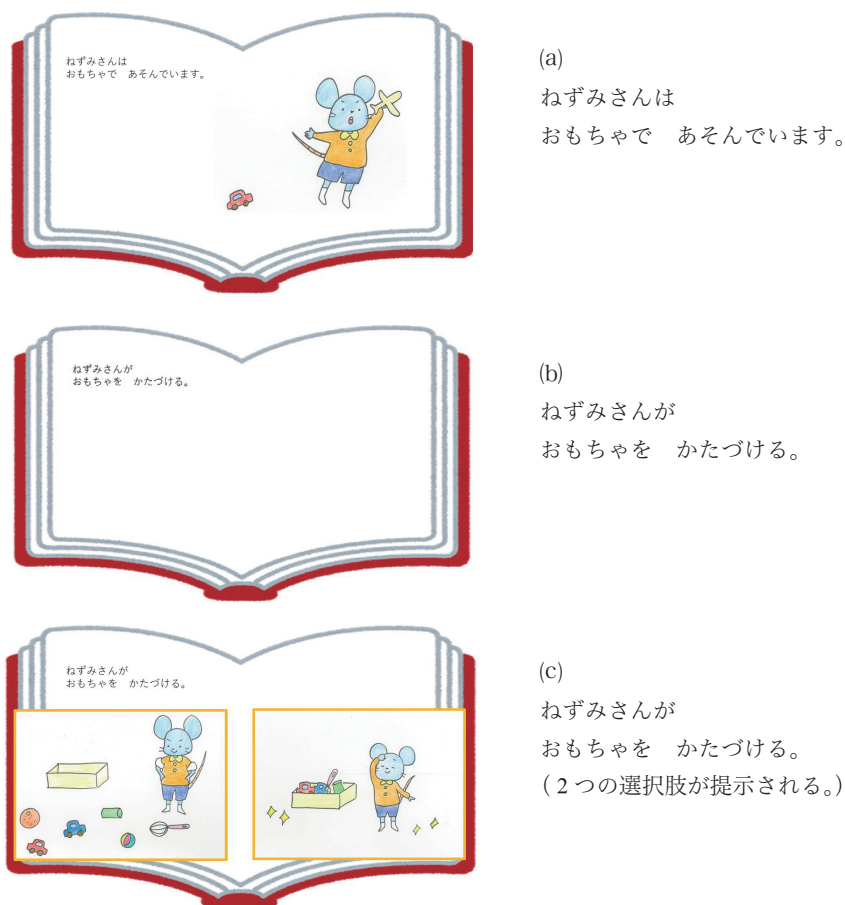


図1 本課題で使用したパワーポイントのスライドの例：達成動詞「片付ける」のスライドセットおよび導入文と刺激文 (図の作成にあたっては、「いらすとや」から一部を利用した)

結果 実験の結果、幼児は年齢に関わらず「ル形」「タ形」の語形変化で示される時制を理解していなかった。図1の(c)のスライドの時にどちらの図版を選択するのかは、使用した動詞の語彙的アスペクトの分類によって決まることが示された。活動動詞では、未来を表した図版が選択されやすく、達成動詞・到達動詞では過去を表した図版が選択されやすい。ここから、2つのことが考えられる。まず1つめに、動詞に時間概念が含まれている可能性があり、動詞のアスペクトの分類によって時間概念の理解が異なることが考えられる。活動動詞と達成動詞・到達動詞の間に実験課題の回答の偏りが異なることから、動詞の限界性の有無によって、時間概念の含まれ方が異なっており、限界性があると過去を含みやすく、限界性がないと未来を含みやすいことが考えられた。2つめに考えられることとして、実験課題の回答は、時間概念（過去・未来）の弁別ではなく、完了・非完了の弁別である可能性も考えられた。

今後の課題として子どもがどのような基準に基づいて実験課題を遂行していたのかを確かめる必要がある。さらに、「タ形」「ル形」が機能していない場合に、何によって時間を決定するのかについて、時間副詞を中心にして検討する必要がある。この時、時制のない言語においても幼児が同様の傾向を示し、時間副詞による決定を行っているのか否かについても検討する。それにより、時制の発達を言語普遍的な観点からより深く考察することが可能となる。